

## 『真実の終わり』

2019年10月21日

私は、日本ジャーナリスト会議（JCJ）が出している新聞「ジャーナリスト」を定期購読している。ジャーナリズムのあり方を提起する視点で編集されている。9月25日号の書評で、明治学院大学名誉教授の吉原功氏が『真実の終わり ミチコ・カクタニ著 岡崎玲子訳』を「身の毛のよだつような『真実の死』」というタイトルで書いている。興味を引かれ読んでみたが、米国の事情に愕然とすることが多々あった。

著者カクタニ氏は、日系アメリカ人二世で、30年以上にわたり、ニューヨークタイムズ紙で書評、文芸批評を担当し、ピューリッツァー賞を受賞している。翻訳本は『真実の終わり』となっているが、原題は『THE DEATH OF TRUTH Notes on Falsehood in the Age of Trump（真実の死 トランプ時代の欺瞞の記録）』である。オックスフォード辞書に「ポスト真実」という言葉が書き加えられてから数年経つが、聞き慣れた「フェイクニュース」や「もう一つの事実 (alternative facts)」といった語彙と並んで、「真実の衰退 (truth decay)」という表現が、また加えられたそうである。カクタニ氏は「ポスト真実」「真実の衰退」を超えて、今や「真実の死」であると言っている訳である。

本の冒頭に「あらゆる場所でニュース報道につとめる、ジャーナリストたちに捧げる」と、ジャーナリストたちに現代社会をどう捉えるかと呼びかけ、書いている。そして、「はじめに」で、ハンナ・アーレントの『全体主義の起源』の中の下記の言葉を引用している。「全体主義的統治の理想的な臣民は筋金入りのナチでも筋金入りの共産主義者でもなく、事実と虚構との区別（つまり経験の現実性）をも真と偽の区別（つまり思考の基準）をもはや見失ってしまった人々なのだ。」この言葉は、別世界からの伝言ではなく、私たちを取り巻いている政治的・文化的状況の、身の毛もよだつような鏡になりつつあると言う。ナショナリズム、同族意識、混乱、社会変革への恐怖、外部の者への嫌悪が再燃し、人々は、孤立した党派集団に閉じ込められ、リアリティを共有する感覚や、党派的な境界線を越えてコミュニケーションをとる力を失いつつある。事実が軽んじられ、感情が理性に取って代わり、言語が侵食されることで、真実の価値が低下していると断じている。

そして、第45代大統領のトランプ氏の嘘は、ワシントン・ポスト紙によると、就任1年目で、計2,140回にものぼり、一日当たり約5.9回のペースであるという。民主主義は共通の基準としての事実を共有し合う中で、構築されていくものであるが、今日の人々は、別々の情報空間の中で、それぞれが活動している。共和党の上院議員ジェフ・フレイク氏は「我が国の歴史上、2017年ほど、真実—客観的、経験的、証拠に基づいた真実が打ち砕かれ、罵倒された年はない。それも政府内で一番影響力のある人物によってだ」と語っている。元司法長官代行のサリー・イーツ氏は、真実が独裁主義から私たちを切り離す要素の一つであると語り、政策や課題を巡って議論することは可能だし、やるべきであるが、これらの議論において、偏向したレトリックやでっち上げによって、人々の感情や不安に訴えるのではなく、共有された事実に基づかなければならないと指摘している。カクタニ氏は、これらの言葉から、米国の政治、社会、文化における諸々の欺瞞の実態をあげ、「真実の死」の現象を提示している。この記述を読んで、日本の状況と変わらないと思うのは私だけではないだろう。真実を問うことを止め、欺瞞の上に構築される社会はどこに向かうであろうか。多様性を認めない、一部の人間に支配される全体主義社会に流されるであろう。目覚めて真実を求め、虚構を排斥せよとの警告の本である。